

六十年前の青春

神奈川県 田澤 昭 男

私が満蒙開拓青少年義勇軍に応募してから、六十年が経とうとしています。昔のことなので記憶もはっきりしていないところがありますが、多感な少年時代に経験した刺激的な事柄は、脳裏から離れることはありません。当時は、多少は知らないところへ冒険をしに行くというような気持ちもあつたようで、今振り返ってみても大陸で青春時代を過ごしたことは、現在の自分にとって精神的にも体力的にもすばらしい糧になっていると思います。

昭和十七（一九四二）年三月、高等小学校二年生のときでした。私は早生まれでしたので、十四歳になったばかりでした。秋田県の職員の方だったと思いますが、学校に満蒙開拓青少年義勇軍の説明に來られました。私は深く考えもせず、詳し

いことも分からないまま、自分は次男であり、下に四人も弟がおり、一人ぐらいいなくても良いのではないか、また満蒙と聞いて広いところだろう、何かきつと良いことがあるだろうくらいの、軽い気持ちで応募することに決めました。学校から帰って神棚の後ろに置いてある実印を黙って持ち出し、応募してしまいました。後で両親に叱られました。満州に行きたいという私の気持ちは変わりませんでした。私の両親は青森県出身でしたが、炭坑夫として次から次へ転々として、北海道を振り出しに最後に秋田県に落ち着くという状態でしたので、親しい友達ができる暇もありませんでした。ですから、友達から満蒙開拓青少年義勇軍について聞くという機会もありませんでしたので、詳しいことは知らなかったのです。

昭和十七年四月、秋田県庁に各郡部からの志願者が集まり秋田中隊が結成され、茨城県の内原に向かいました。そこには満蒙開拓青少年義勇軍の訓練所があり、各都道府県からの中隊が集まってきました。宿舍から鋤を担いで畑に行き、サツマイモの苗を植えたりしました。一日中畑仕事で、夕方宿舍に帰るのが日課でした。食べ物は食事だけで、間食などはありませんでした。

畑仕事のほかに軍事教練もありました。私は体が小さかったからでしょうか、銃が肩から滑り落ちて、いつも叱られていました。畑仕事の鋤も重くて、長くは担いでいられません。こんな状態でしたから、私はみんなのようにまともな作業ができなかったのです。多少悩んでいました。六月ころ、ラッパ鼓隊の募集がありました。ラッパ鼓隊に入れば、不得手な畑仕事には行かなくていいのです。考えた末、中隊長に申し出て、ラッパ鼓隊に入れてもらって訓練を受けました。訓練の甲斐があつて起床、点呼、食事、作業始め、消灯などが吹けるようになりました。

訓練所では六時起床、身辺を整え弥栄広場に集合して体操、加藤完治所長の訓示があつて、その後全員で「弥栄」と斉唱しました。最初「弥栄」とは何のことか分かりませんが、「万歳」ということだと分かりました。朝の行事が終わってから、所外訓練に出掛けます。所外訓練では、満州に行つてから行なう開拓に備えて畑仕事を行な

訓練所にいる訓練生は、とにかく育ち盛り食べ盛りの若者ばかりでしたから、いつもお腹をすかせていました。夕食後に、ときたま饅頭のような

甘いものが出ましたが、それが楽しみのひとつでした。故郷から小包が送られてきて、中に甘いものが入っていたのでしようが、皆の前で食べることもできず、夜中に布団をかぶってこっそり食べている人もいました。今ひとつの楽しみは、故郷からの便りでした。兄の描いた東條英機首相の絵も送ってきました。私は所内の売店で満州各所を描いた絵はがきを買い、家に送りました。

日曜日は仕事がお休みなので、ゆっくり過ごしました。私はお腹がすくのがたまらないだけで、家に帰りたいとか親の顔が見たいなどとは思いませんでした。夜布団の中でシクシク泣いたり、次の日起きてこない人がいるのを知っていました。それが仮病であったことも、後で分かりました。このような症状は屯墾病と言われていたのです。

訓練所に入所中、一回だけでしたが出身県への出張訓練がありました。私たち秋田中隊は、秋田県の和田町に行き開墾訓練をしました。私はラッパ鼓隊にいましたので、作業はせず衛兵として勤

間は狙われやすいこともあって、暗くなつてから出航するので、すぐには乗船できず夜まで待ちました。夜の出航が何時だったか、私たちには分かりませんでした。船の中で支給された食事だけでは、お腹がすいてしまいます。仲間の一人が、そばにあった積み荷を開けてみたら柿が入っていたので、悪いなと思いつながらみんな黙って食べました。

朝、羅津港に着きました。船を降りて辺りを見渡すと、木が一本もないはげ山が見えるだけで、人影もまばらでした。羅津から汽車に乗りましたが、行く先も分からずみんな不安な気持ちでした。列車の中は異様な雰囲気でした。どのくらい時間が経つたのか定かではありませんでしたが、降りたところは大石頭というところでした。町には高い煙突がたくさん建っていて、駅前には木材がいっぱい積んであったのが印象的でした。

駅の近くに満蒙開拓青少年義勇隊大石頭訓練所があって、到着した私たち隊員に対して所長の訓

務しました。三週間の作業を終えて内原に戻りましたが、この間に両親が面会に来ました。

九月の初めころ、母親が一番下の弟をおんぶして内原の訓練所に面会に来ました。キャラメルとかお菓子、いなり寿司などを持って来てくれました。そのとき何を話したか覚えていなくて、持って来てくれた菓子、寿司などを食べることに夢中でした。弟は一歳ぐらいでしたので、頭の上を赤とんぼという愛称で呼ばれる複製の翼と胴体も赤い色の練習機が飛ぶのを見て、「オーオー」と声を上げていました。

九月末いよいよ渡満ということになりました。荷物といつても何もありませんでしたが、家から送ってきた刺子の半天など大事に仕舞い込みました。当日全員整列、鍬の柄を担って内原訓練所から内原駅に向かって行進しました。私はラッパ手として列の先頭でラッパを吹きながら行進しました。内原駅からは、特別列車で東京に向かい宮城に参拝を済ませた後、新潟港に向かいました。昼

示がありました。そこから四キロメートル離れた所にある秋田中隊の宿舍まで、荷物を持って徒歩で行きました。宿舍は木造の長屋で五棟建っていて、一棟に五部屋あり、一部屋に七人が入りました。部屋と部屋の間には、両方の部屋を暖めるペチカがありました。部屋に落ち着くと、すぐに冬服が支給されました。防寒服、防寒帽、手袋など、新品ではありませんでしたが、綺麗に洗濯されていました。防寒服を着て、見るからに暖かそうな服装をして撮った写真を家に送りました。

私たちがまずやったことは、冬を越すための燃料になる樹木を伐採することでした。また、畑を作るために荒れ地を開墾しました。荒れ地の開墾は大変な作業でした。冬が近くなって山の仕事はとて寒く、宿舎から持参した弁当は、食べるときにはガチガチに凍っていて、ぶるぶるふるえながら食べなければなりませんでした。それはとても辛く悲しいことでした。頭に浮かんでくるのは食べることばかりで、畑に穴を掘って埋めてある

ニンジンや大根などまで食べました。特に、ジャガイモは凍っているのでサクサクして、警備の人に見付からないように注意しながら美味しく食べました。お腹をすかせているのは私だけではなくみんな同じでしたから、出荷する豆を詰めた麻袋から黙って豆を抜き取ったりしました。「だれがしたんだ」と叱られることもたびたびでした。今さら満州から日本に逃げて帰るわけにはいきません。ホームシックにかかる人が目立つようになってきました。

大石頭の生活になれてくると、いろいろな悪知恵が働くようになってきました。配給される軍手やタオルなど、余った分を隠し持って訓練所の金網をくぐり抜けて満人町へ行き、食べ物と交換しました。このころはまだ穏やかな時代だったので、満人町をぶらつくことができました。そのとき食べた中華料理、饅頭、月餅などの美味しかった味は、今でも忘れません。

満州の寒さは特別で、青森生まれの私でもとき象は、静かなところだなあというものでした。その後原隊復帰を命じられ、秋田中隊に戻りました。二十年の春、挺進隊員に選ばれて奉天（瀋陽）に行くことになりました。勤務先は、事前には知らされませんでした。奉天市の鉄西区の三菱機器重工業株式会社でした。この辺りは工場街であり、東洋一だという高い煙突がたくさん建っていました。工場の横の道に面した所には、食糧補給所がありました。

私が配属されたのは重工の第一から第七工場まであった第七工場でした。そこでは、軽戦車や自動車小銃の部品を作っていました。私と一緒にこの工場に行ったのは何人だったのか、はっきりは知りませんが、私たちの宿舎は別棟の食堂の二階にありました。工場で働いているのは、青少年義勇軍の人よりも兵器を作っている関東軍の軍人が主力でした。軍人たちは、工場の近くの寮に住んでいました。ちよつとしたことでHさんという兵隊さんと知り合いになりました。私たちには

どき寝小便をしまい、朝になって布団を干しては、みんなに笑われました。

別の所にいる岡山中隊から、ペチカの修理専門班が私たちの部屋の壊れたペチカの修理に来ました。その人にいろいろ聞いた話の中で、ペチカの修理専門班の他にも木工、トラクター、自動車運転、醸造、炊事、事務などいろいろな特技班があるということでした。その中で、ペチカの修理専門班と一緒に活動する左官班が、欠員を募集していることを聞きました。特技班は本部中隊の管轄です。私は左官班に入りました。春から秋までは畑仕事をしますが、冬になるとペチカの修理班と左官班は、班の幹部を長にペチカの修理が始まります。幹部が一緒なので、昼食など特に待遇がいいので、それがまたひとつの楽しみでした。

本部中隊にいる間もあまり戦況について知らされることもなく、二年半が過ぎました。その間に一度、本部の幹部が国都新京（長春）に出張するとき同行を命じられました。そのときの新京の印遊びに行く所ありませんでしたが、軍人の寮で慰安会などがあるときにはHさんが誘ってくれて、一緒に歌や演劇などを見せてもらい、楽しかったのを覚えていきます。

昭和二十年八月十五日、この日は朝から暑い日でした。講堂でラジオを聞いて軍人が泣いていました。どうしてなのかそのときは分かりませんでした。日本が戦争に負けたことで、天皇陛下がラジオ放送で国民に直接語りかけられたということでした。私たちにはそんなことは分かりませんでした。日本が戦争に負けることなど考えてもいませんでしたし、今から思えばあの時期B-29が飛んできて爆撃されたことがあったが、あのころから戦況が悪くなっていったのかと、後で思いあたったくらいでした。上司からも本当に何も聞かされていませんでした。ただ工場の守衛室に最近現れた四、五人のアメリカ人たちは、奉天で捕虜になつていた人たちではないかということでした。やがてアメリカ人はいなくなり、代わりにソ連兵

が工場の監視にあたるようになりました。

後で聞いたのですが、私たちがいた三菱機器重工業は襲われませんでした。よその工場では満人たちが工場の機械器具などを略奪するなど、大騒ぎをしていたようでした。他の紡績工場、陸軍の物資食糧補給所、顕微鏡や双眼鏡を作っていた日本工業などでも、同じように略奪に遭っていました。私たちは、工場の窓からその有様をぼうつとして見ていました。

ソ連兵が進駐してきて暴動は収まりましたが、ソ連兵が監督して、武装解除された日本兵に工場の工作機械などすべてを運び出させて、列車で本国へ持ち去りました。搬出作業が終わった後、日本兵の姿が見えなくなったのは、シベリアに送られたのではないかとわさされました。中には要領よく逃げた兵隊もいたということでした。

私たち青少年義勇隊員はこれからどうしたら良いのか全く見当も付かずにいましたが、南の方に行けば早く日本に帰れるといううわさを耳にして、

「と云われました。『他の人に分からないようにしてほしい』と頼んでマーチヨに乗せられて、隠し場所の防空壕を案内しました。『他にないか』と聞かれましたが『知らない』と答えたら、今度は『中国共産党に入らないか』と云われ、断ると『弾薬など見付いたら報告するように』と申しつけられ、身分を証明する書類を渡されて釈放されました。」

電球会社に戻ると、Hさんからのことづけがあり、指定された場所に来るようということでした。そこに訪ねて行ったら、Hさんと二、三人の大人の方がいました。そこに数日泊まり、HさんがIさんを紹介すると連れて行かれました。そこには十人くらいの大人が寝泊まりしていました。そのときは分かりませんが、今考えてみるとやくざの一味だったと思います。お金を稼ぐために、馬車で石炭を運んでいました。その馬車にはゲーペーウーが必ず乗っていました。そのころ石炭は貴重品でした。仲間の一人にロシア語を話

脱出した隊員もいました。私は、軍人さんの慰安会にたびたび誘ってくれたHさんから声を掛けられて、仲間数人と電球を造る工場を紹介され、就職することができました。お陰で生活が安定しました。

電球の工場の周りには、いつも八路军が見回りに来ていて、ある日、工場の側溝に小銃の部品が落ちていたのを見付け、工場長の所にそれを持ち込んで、だれが捨てたのかという騒ぎになりました。ものがものだけに三菱重工業からきた人ではないかと疑われ、私ともう一人が八路军の中国共産党本部に連行されました。言葉は分からないし、どうなることかとびくびくしていました。白いご飯と豚汁をご馳走してくれました。この人たちはこんな美味しいものを食べているのかと、同僚と二人、腹いっぱい食べました。食後、身振り手振りでの会話しかできませんでしたが、八路军の言い分は銃や爆薬のある所を知らないかということでした。「知っています」と答えると、「案内し

ず人がいましたので、ゲーペーウーと話をつけて有利に石炭を運ぶことができました。私は、特に何もしないで馬車の隅っこに乗っているだけでした。」

約半月ぐらいその仕事を続けていたある朝のこと、Iさんの使いだと訪ねてきたので戸を開けましたら、銃を構えたソ連兵五、六人がドヤドヤと土足のままで入って来ました。両手を上げて壁に向かって立たされました。何をされるのか、殺されるかもしれないと、恐ろしくて震えが止まりませんでした。ソ連兵は家の中を隅から隅まで探して、日本刀十本と拳銃五丁を発見、押収して行きました。入れ替わるように公安隊が来て、鉄西警察の留置場に連れて行かれました。留置場は八畳間ぐらいの広さで、そこに十五人が押し込められました。満足に寝ることもできませんでした。全部日本人で、留置場にはIさんの所にいたSさんもいました。そこで、Sさんからことの真相を聞きました。

私もSさんも、朝早く寝込みを襲われて連行されました。襲ってきた公安隊の中には、一緒に仕事をしていたゲーペーウーのメンバーもいました。そのゲーペーウーは公安隊と違って武器など持っていないませんでしたから、彼らも調べ上げられたうえ、手先にされたに違いありません。

狭い所に重なるようにして寝ていましたが、夜中に足を私の頭に伸ばしてくる人がいましたので、ちよつと邪険に押し返しました。

朝、目が覚めたら、私に足を伸ばしてきたと思われる人は死んでいました。何ともやりきれない気持ちでしたが、看守から「お前たちで外に掘ってある穴に運べ」と言われましたので、言われた通りにしました。名前も何も分からない人でした。次に死ぬのは自分かと不安に思いました。

半月ぐらいそこに入っていたころでしょうか、仲間のあるグループが、脱走するために壁をスプーンで削っていました。若い者たちは見張り番でした。完成間近になったころ、Sさんは巡視にき

はばらばらに留置されました。私は入り口に近い一番目の留置部屋に入れられました。留置部屋に入ると、正座して動かない人がいるのに気が付きました。どうしてか聞きますと、数回脱走したので、逃げられないように膝を撃たれたから、あのようにして坐ったままなのですという説明でした。そんな話をしていると、看守に見とがめられ、モーターのベルトでいやというほどたたかれました。思わず悲鳴を上げるほどの痛さでした。この部屋の窓から拷問部屋が見えました。耳に電極を挟み、電気を流されて苦しみもだえる姿が見えませんでした。また水を出しっぱなしのホースをくわえさせられどどん飲ませて、膨らんだお腹を足で蹴って吐き出させるのを繰り返す拷問でした。苦しみわめく声は、耳から離れませんでした。見ていた私も、そうされるのではないかと思うととても怖くなりました。

次の日から一人ずつ取り調べが始まりました。私は逃げるとき寒かったので、その部屋にあった

た日本人医師に頼んで、私と他三人の体調が悪いから、別の部屋に移した方が良いと警察官に言ってくれました。移してくれたのは、奉天工業大学の一室でした。しかし、その講堂には避難民がいっぱいいて、病人のうめき声、子供の泣き声、それはそれは大変な所でした。四人は逃げることを考えました。満人が朝食を持ってきて戸を開けたときに、ほとんど四人一緒にはだしのままで飛び出しました。仲間の一人が、Iさんの奥さんの住まいを知っていたので訪ねて行きましたが、ここは危ないと別の所を紹介してくれました。

そこには八人ぐらいの人がいました。しかしそこも安全ではありませんでした。そのころ、日本人が数人集まると密告されることが多かったのです。理由は、ヤマトホテルにソ連軍の司令部があり、そこを日本人が集団で襲うという事件があったためでした。やはり密告されたのでしょうか。朝早く公安隊が来て逮捕され、また鉄西警察署に連行されました。留置所は五室ぐらいあり、私たち

緋の着物を着ていました。私の順番がきたときもそれを着ていました。部屋に入ると取調官は「ニデ ユウピン」（病人か）と聞かれたので「うん、うん」とうなずくと、何も聞かずに部屋に帰されました。その緋の着物は食事を運んでくる満人に売りました。お陰で留置所では食べられないものを持ってきてもらいました。脱出した経験のある私たちなので、夜も警戒は一段と厳しく、私がたたかれたモーターのベルトで、廊下や部屋の壁をピシピシとたたいて回っていました。二、三日経ったころ、一人の日本人が廊下に立たされ、白系ロシア人に日本刀のさやで殴られていました。白系ロシア人は、「ヤポンスキ、ヤポンスキ」とわめきながら何度もたたいていました。日本人は脱走兵でしょうか、悲鳴とうめき声は震えていました。

数日後、年配の日本人が来ました。そして私たちに「ここから出るためには身許引受人が要る。そういう人はいるか」と聞かれました。私は知人

もだれもないので「いない」と答えると、「自分が引受人になる」といって警官と話し合っていました。どう話が付いたのか分かりませんが、留置所から出してくれました。その方がどういう人なのか名前も何も分かりませんが、今でも本当に感謝しています。

三菱の幹部が住んでいた寮に行ってみましたら、秋田中隊の人が帰国の準備をしていました。しかし私は秋田中隊と行動を共にしていなかったから、帰国の許可がでないと行われました。みんなが帰る前日、秋田中隊の幹部が亜細亜ビールという会社を紹介してくれました。亜細亜ビールはウオツカや水飴を作っていました。給料は少ししかくれませんでした。ビールの現物支給がありましたので、酒屋に持って行きお金と交換して埋め合わせをしました。

私は特別な技術を持っているわけではありませんでしたので、社宅に住んでいる人たちの野菜や肉など食料品の買い出しを担当しました。小さな

でしたが、たばこを売りに来たら買っては同僚に配りました。

二十二年九月半ばころ、会社の庶務課の人に呼ばれ、技術者以外の人は今度が引揚げの最後の機会だと言われ、帰国することになりました。秋田出身の同僚一人と、東京に帰るといふ人など、五人が一緒でした。

まず北奉天に行き、そこから無蓋車で錦州に行きました。錦州では許されている物以外の宝石、お金、写真などは全部没収されてしまいました。検査が済んだ荷物をまとめて、葫蘆島コルトウに行きました。そこからリバティ型貨物船に乗船しました。全員の乗船が終わって出航しましたが、日本を目前にして病気で亡くなる人がいました。どんなにか悔しい思いだったでしょう。その人のお葬式で、私は水葬というのを初めて見ました。遺体を海に沈め、船は汽笛を鳴らしながらその回りを三回回りました。

「本土が見えてきました」と船内放送があつて

子供と見られていたらしく、怪しまれることもなく自由に歩き回れました。そのころ、市場にはもう日本人の姿はほとんど見られませんでした。町はすっかり落ち着いて怖い思いをすることはありませんでしたので、映画なども見に行くことができました。エノケンや、ときにはソ連の映画も見ました。繁華街には道路の両側に「ボウズ」「ギョウザ」などを売るいろんな店が出ていて、お金さえあれば食べ物には困りませんでした。

ある日「ギョウザ」を買って食べていると、北満から避難して来たらしい人から「お金があつたら少しいただけませんか」と声を掛けられました。少しでしたが差し上げました。こんなことが何回かありました。みんな汚れたままの服装で、特に子供連れは気の毒でした。亜細亜ビールに勤めるようになってからは衣食に困ることはなくなりましたので、そういう人たちには衣類なども分けてあげました。また、子供が物売りに来たときは全部買ってあげましたし、私はたばこは吸いません

皆甲板に出ました。遥かに見えた日本の島々は鮮やかな緑色で、なんて綺麗なんだろうと思いました。船は博多港に着きました。船内で検便とDDTの散布を受けました。検便の結果だれも異常がありませんでしたので、下船が許可されました。

下船してから、今度はアメリカ軍の荷物検査がありました。検査が終わって、日本人の係の人から各自千円のお金と、絶対になくさないようにとくどく注意されて引揚証明書ももらいました。今、私は日本の土を踏んでいるのです。新潟から満蒙開拓青年義勇軍として五年間、満州に行ったのは何のためだったのかと考えましたが、いろんな考えが頭の中を駆け回ってまとまりませんでした。五人の仲間と列車で東京に向かいました。途中広島駅に着いたとき、広島市が全くの焼け野原になっていたのを見て驚きました。どうしてこうなったのかと聞いたら、原子爆弾を落とされ一瞬間にこうなったのだと聞いて、また驚きました。名古屋に着いたとき、満州に行くとき見た市街の

姿が、全く違う焼け野原の名古屋だったので、戦争のむごたらしさをつくづくと感じさせられました。車窓から、荒廃した本土の様子を見るにつれて、だんだんと暗い気持ちになってきました。

私たちの列車に乗ってくる人々が手に手に大きな荷物を持っていることに、私たちは異様に思いました。何でそんなに大きな荷物を持っているのか分からなかったからです。やがてそれが配給でないヤミの物資で、買い出しの荷物だということが分かりました。

東京駅に着いて、一緒に帰ってきた「夫婦と」機会があったらまたお会いしましょう」とあいさつして別れ、私は上野に向かいました。上野で、弟たちにブリキ製の電車のおもちゃを土産に買い、秋田に向かいました。満州から一緒だった同僚とも秋田の駅で別れ、私は花岡の家に帰りました。ところが、そこは空き家になっていてだれもいませんでした。近所の人に聞いて、家族は岩館に引っ越したということが分かりましたが、夜も遅く

され働きました。その仕事は三年ぐらい続きましたが、仕事上のトラブルがあつて辞めることになりました。

それから二、三仕事をしましたが、どれも自分に合いませんでしたので、絵を描いている兄の所に行きました。兄は絵を描く費用を得る手段として子供に絵を教えていました。兄を手伝いながら私も絵を教えることを習い、また自身、油絵を習いに行きました。仕事は順調に進んでいましたが、昭和三十九年に医療ミスが原因で視力に障害を受けました。しかし子供に絵を教えることと、油絵を描くことは続けました。

もうこの仕事を始めてから四十五年にもなりません。視力に障害も持って絵をなりわいとすることは大変でしたが、満州での五年間を考えると、今はやさしい家族に囲まれていることですし、大変幸せに思っております。困ったときに、なにくそと頑張る力は満州で培われたものと思っております。

なっていましたのでその人の所に一晚泊してもらい、翌日岩館に行つて探すと、長屋に住んでいました。母親は留守で父親と兄と弟たちがいて、弟は一人増えていました。皆私を見て、幽霊でも見ているようにびっくりしていました。

秋田での生活は本当に大変でした。食糧は配給制で、兄を頭に男ばかりの兄弟七人、それに両親ですから、その生活を賄う母親の苦労は大変なものでした。私もすぐに仕事をして収入を得なければなりませんので、父や兄が働いていた鉱山で働くことにしました。父や兄と一緒に鉱山で働くことができましたが、労働は厳しいものでした。そのうち、炭鉱は閉鎖になってしまいましたので、私たちは実家に行つて農業を手伝うことになりました。私はその後転々と仕事を替えましたが、兄を頼つて東京に行くことにしました。上京したのは昭和二十五年ですから、朝鮮戦争が始まったときでした。横須賀市田浦で、朝鮮戦争に使用する弾薬の積み降ろしをする仕事場の警備員に採用

振り返ってみますと、いろいろなことがありました。満州にいるときもひもじい思いをしました。帰国してからの食べ物不自由なことは大変なものでした。満州でのいろいろな恐ろしかったことなど今思い出してもぞっとしますが、いろいろな方の手記を拝見してみますと、私などは独り身でもありましたし、運の良い方ではなかったかと思つています。

今脳裏に浮かぶのは、飢えや病気で泣き叫ぶ子供の声と、父母を亡くして一人で物売りをしていた子供のことで。たばこを売っていたあの子は、あれからどうしたのでしょうか。満州にいるころは安易な気持ちで、回りから何も知らされることもなく、世の中がどう動いているかも知らず、ただ、空腹を満たすことばかり考えていた私自身の愚かさ、またそのような時代であったことが悲しい。二度と過ちを繰り返してはいけなさと強く思つています。